

平成三十年は、独歩没後百年の節目の年になりました。これを機に独歩が最期を迎えた南湖院がある茅ヶ崎市では独歩に関わるイベントが開かれ、また、フェイスブックには、独歩没後110年事業のグループサイトができました。

新たな独歩の姿を語る 講師 立教大学教授 小野正嗣氏

昨年度の独歩忌は区切りのよい第百十回独歩忌となり、それなりの独歩忌にしようと企画して、佐伯市出身者で芥川賞作家の小野正嗣先生に第百十回独歩忌の講演を依頼しました。依頼の際、先生はアメリカ合衆国のダラスに出張中ということで、メールでのやり取りで講演会の講師を依頼しました。四月はじめの頃は、六月二十三日での講演



はOKというものでしたが、六月二十三日に近代文学者関係の会議があり、都合により六月二十四日(日)では都合がつかないということで、佐伯文化会館中ホールにて十四時より開演しました。

た。第一部は独歩の時代に作曲された曲や演奏を企画しました。独歩と同時代の人の作曲か、独歩の関わりある曲などを演奏してもらい、独歩が生きた時代を感得してもらおうとしました。

前回の独歩忌にフルート独奏をいただいた久知良さんが所属している「大分笛の会」が1 バッハ作曲「小フーガ」 2 ドボルザーク作曲「スラブ舞曲」 3 「さくら」を演奏しました。ドボルザークは、独歩と同時代の人で、有名な「新世界より」は千九百六十年に小澤征爾氏により日本で初演されました。「大分笛の会」は、いろいろな金管楽器があるので、その楽器の紹介もかねて、音色の違いなどを紹介されました。「さくら」の変奏曲は独奏と伴奏で素晴らしい演奏を披露されました。

歌曲は、西谷英恵さんが「雀の子」と「荒城の月」を歌唱しました。「雀の子」は、実はシューベルトの菩提樹の替え歌であり、明治唱歌の第五集に収められており、当時は日本人に受容できるように歌詞をドイツ語から正確に翻訳せず、日本人にわかりやすい替え歌と変更されたようです。「荒城の月」は、作詞家である土井晩翠とは同年代の人で、作曲家は大分県出身の滝廉太郎です。朗々と歌いあげ、それを聞いていた人の中には、

大いに感銘を受けたのでしよう、涙を流す人も見られました。

第二部は、小野正嗣先生による「文学の楽しみ」という演題で講演をしていただきました。文学の楽しみという大きなテーマであったので、小野先生の専門的な話になるかと思つていましたが、相当な時間をかけ、独歩についての調査を行ったと思われる内容みでした。

まずは、矢野龍溪との関わりについて、龍溪が徳富蘇峰に教師の依頼をしたところ、蘇峰が国木田独歩を紹介したことは、大いに知られています。が、それ以外にも矢野龍溪が日清戦争の交渉役として外国に行っている間、龍溪の家の留守番役をしたり、いろいろな画報がこれからの出版物として、大いに売れることを紹介し、独歩に編集者としてその才能を開花させました。いままでの龍溪と独歩の関わりよりもさらに深い関わりがあったことや、文学者独歩ではなく、編集者独歩のすがたを紹介してくれたことは、佐伯市民に新たな独歩観を形成させてくださったかと思われまます。

来場した人数は、二百三十五名で、来場者の意見として、「芸術的な楽しい時間を過ごさせていただいた」などの感想が聞かれ、どなたにも満足

読書会 「豊後の国佐伯」の執筆順は、独歩の関心の強い順に書かれている

八月五日(日)十四時より佐伯東地区公民館において、中島礼子先生の指導で「豊後の国佐伯」を読書作品として、読書会をおこないました。

中島先生に読書会に入る前に、国木田独歩が「豊後の国佐伯」を執筆する前後の状況を説明していただき、品として、読書会をおこないました。

矢野龍溪から鶴谷学館の教師の適任者を紹介してくれと依頼された徳富蘇峰は、国木田独歩を推薦する。独歩は明治二十六年九月三十日佐伯に鶴谷学館の教頭として赴任する。ワーズワース詩集を前年入手しており、ワーズワース詩集に感銘した独歩はワーズワースの世界をこの佐伯に見ることができ、十か月の間、熱心に佐伯中を遠行した。佐伯から上京した独歩は国民新聞社に入った独歩は、

四年後に「豊後の国佐伯」を国民新聞に発表する。

上記のような執筆当時の前後の状況でした。と説明していただきました。

参加者の中には、中島先生の国木田独歩の話が聞けるかと思つて参加している人もいましたが、参加者一人ひとりに感想を聞きました。



「独歩は、夜分佐伯を徘徊することが多く、暗い中の情景を詳しく書いているのは、佐伯を詳細に見ていたのではないか。」

「独歩は十ヶ月ぐらいいしかない中で、これだけ佐伯の情景を詳しく書いているのは、佐伯を詳細に見ていたのではないか。」

「城山のなかで、「古城の妖精目覚めしにあらざや」 「一大深夜に市街の一端に吠ゆれば、城山の山彦ただちに答へて、これを他の一端に伝ふ」などは非常にフアンタジーがあり、また今ではわかりにくい文語で語っており、かえってその時代に合った表現をしているのではないのでしょうか。」

「秋になると、国木田独歩の『春の鳥』を読みます。また独歩の作品をよんでみたいですね。」 「春の鳥にかわつて、1の鼻声について、独歩は鳥について非常に関心を持っていて、この鼻声から頭を離れず、名作といわれた『春の鳥』に結びついていったのではないのでしょうか。」

2の乞食については、ふつうでは書かないでしょうが、独歩は「彼は何者」と書いてるように紀州によつて、人間とは何かと考えさせられたのではないのでしょうか。」などの感想が聞かれました。

先生は最後に「独歩の関心ある順にこの随筆を書いた。1鼻声は『春の鳥』2の乞食は『源叔父』の作品に結びついていった。「豊後の国佐伯」はこれから先の独歩の文学の展開を予告した作品だ」と思えます。と締めくくりました。

豊後の国佐伯の復刻演奏会が十一月(四)日佐伯文化会館にて行われました。三〇年ぶりの復刻演奏でした。作曲した佐藤信武氏の遺族の方の消息を探していましたが、ついに分からないままの公演となりました。中学生一五〇名一般七〇名ど



の大合唱団になりました。土崎譲さんが音楽監督をされ、佐藤美枝子さんと西谷英恵さんの地元のリリストを迎え、地元の方々を募集して「豊後の国佐伯合唱団」を結成して、今回の復刻演奏会を実施しました。

有限公司 ヒロ

裕

佐伯市中村北町1-12

TEL 0972-22-2917

独歩の通勤路を中心とした遠行



十一月十七日(土)は、独歩の四季プロジェクトの最後のイベント、独歩の通勤路を中心とした遠行をおこないました。そして、その近辺にあるうまい食べ物を試食するイベントを宮明さんの解説で行いました。集合場所は汲心亭で、菓子作り「3時」さんのマリネレモンをつかったお菓子にお茶をいただき、これからいただくおいしい食べ物の食欲増進剤をかねていただきました。つぎに、国木田独歩館を訪ねましたが、ちょうど、文豪ストレイドッグスも行われており、ちょうどよい時期に実施できました。この日は観光客も多く、どこから来られたのかうかがうと、東北地方からわざわざこの文豪ストレイドッグスの

催し物を知り、訪ねて来られたという人もおられました。観光交流館では、「豊後の国佐伯」にも書かれている独歩が好んで食べた樽柿を賞味しました。

独歩は坂本邸から鶴谷学館に通勤する通勤路である神明通りを通っていくとちょうどお昼になりましたので、「つね三」で佐伯の郷土料理である「あじずし」と「ゴマ出しうどん」を賞味しました。これは佐伯が誇る郷土料理で、『「つね三」のすしとうどんは格別おいしかった』と参加者は感想を述べておりました。そして、独歩の勤務先の鶴谷学館の前で説明をいただき、ク



リスチャンであった国木田独歩が佐伯で通っていたその近くのキリスト教会の跡を確認しました。

そして、昔、佐伯の商売の中心であった船頭河岸を探索しました。現在の船頭町は家屋の位置はそのままですが、住吉神社や現在通っている道路・川の流れは随分と変化しており、むかしの船頭河岸の跡を確かめると、船着き場へ至る石段が残っておりました。この跡から昔の船頭町が偲ばれました。「しのぎき製菓」で「しきし饅頭」の歓待・「たけばやし製菓」の「甘酒饅頭」の賞味とお腹いっぱいのみまみ食いをいたしました。帰りには地元のみと地元のおいしいものがたくさんあることがわかりました。



佐伯の名物・名産も賞味した遠行でしたが、独歩は「源叔父」に登場する紀州と明治二七年一月二十七日に船頭町で遭遇します。このときに、独歩は紀州に饅頭をあげたということを日記に記しています。おそらく、今回の遠行で訪ねた「篠崎製菓」か「菓子司武林」の饅頭であったと思われるかもしれません。独歩は、紀州の存在を常に意識しておりました。独歩の自然観・人間観からして、おそらく空腹の紀州を見て、饅頭を施したものと思われまます。独歩の優しさが垣間見られるとともに同じ人間としての紀州に対する当然の行為を行ったものと思われまます。

明治の文豪国木田独歩」の幼少から佐伯来訪までの生活譜を探して

古市区 木村一郎

国木田独歩が、幼少から佐伯の鶴屋学館に教師として訪れるまでの、生活環境、読書経験、学習体験等。「佐伯なくして独歩なし」とまで言われるまでのその要因について考えてみました。

処で、子供のころ驚いたり、感激した体験をお持ちのことと思いますが、少しだけ私の体験をお話したいと思います。東雲小学校浪太分校5年生の時、上級生の家で旧海軍の双眼鏡を覗いた体験です。夜になると、豊後水道から灯台の光が約二秒間光ります。昼間は影も形も見えませんが、双眼鏡を灯台の方に向けて、目に飛び込んだのは、白黒に塗られた初めて見る「水の子灯台」。双眼鏡の威力に驚いた瞬間でした。河内中学3年生の修学旅行。最初に訪れた熊本市水前寺公園。東海道五十三次を彷彿させる造園と、新緑に映える清水の美しさに感動。後に、勤務地の東京都文京区小石川後楽園、六義園は、江戸時代を忍ばせる雄大な美しさにつながりました。更に郷里が、山梨県韮崎市の先輩に同行した夜叉神峠。南アルプス白峰三山の展望台。その迫力と神々しさに興奮。登山に夢中になった長野県北アルプス。標高日本3位の奥穂高岳の山頂。富士山まで続く青い山脈は山岳写真のとりこになりました。又、大菩薩峠の源流から羽田飛行場まで流れる多摩川の、自然と生活の関わり合いを数名で撮影しクラブ写真展になりました。最後に長野県安曇野の冬の写真撮影に出かけました。臼杵出身の吉丸一昌作詞の「早春譜」。二番の詩「氷解けさり葦は角ぐむ・・・」詩の感じが臭う場所だと思いました。以上写真表現の努力は致しましたが、その臭う詩的心はあっても、文章化はできませんでした。

冒頭で申し上げた独歩が、卓越する文章の表現力と体力は如何に育まれたのか考えてみました。独歩は出生の事実について、悩んだ時期もありますが、まず居住した場所を検討してみました。

- 一歳 銚子 三歳 下谷中御徒町(旧脇坂藩邸内) 五歳 山口町 六歳 広島 七歳 錦見村(現岩国市) 十二歳 山口町十四歳 山口中学寄宿舎 十六歳 神田の法律学校通学下宿 十七歳 東京牛込区(現新宿区) 早稲田町 十八歳 早稲田鶴巻町 十九歳 牛込区若松町 二十歳 山口県真郷村(現田布施町) 二十一歳 柳井津 二十二歳 東京から佐伯町へ。

明治の作家の中で、国木田独歩ほど生活圏のひろがりを持つている人は少ないと思います。銚子で生まれ、幼少期を山陽道を転々として、東京生活から佐伯まで、学校は、現岩国小、山口町現白石小 山口中学 東京神田の法律学校 東京専門学校英語普通科中途退学(現早稲田大学)です。特に山口中学では父が菘に転勤したため、寄宿舎に入りました。夏 冬の休暇には菘まで八里(32キロ)の道を歩いて帰省し、道中の情景は後に「画の悲しみ」に活写されています。これらの経験や体験が抜群の体力を作り、絵画的 誌的心を養成したものとと思われます。独歩が発表した出版作品を見ると、十七歳 群書二巻レ 十八歳 アンペション(野望論) 感ずる処を記して明治二十二年を送る 十九歳 水車と姦淫公許 二十歳 吉田松陰及び長州先輩に関して 二十一歳 民友記者徳富猪一郎(徳富蘇峰の本名) 田谷文学とは何ぞ 二十二歳 不知庵罪と罰 二十三階堂主人に与ふ 議会 用達会社 欺かざるのき記着

手小学生徒「田口卯吉を訪ふ 田口卯吉氏の手簡です。

徳富蘇峰が、国木田を鶴谷学館教師に推薦をされたのもうなずけます。静閑なる自然の佐伯町滞在は、わずか十か月でしたが、自然の愛好者となり、崇拜者となりました。城山に登ること十四回ほど 元越山 彦岳登山 本匠の銚子淵、青山黒沢桜の見学、海水浴釣り、村落、漁村 数回巡り歩きました。冬休み帰省の際に柳井津から船、汽車で熊本。熊本から阿蘇経由佐伯まで馬車徒歩で到達。素晴らしい勇氣と体力です。

独歩は功名心が猛烈な少年であり、賢相名将ともなり、名を千歳に残す一心で、憲法論、経済書を読み、やがて二十歳では文学科の講義でマクベス オセロを青年文学会で幸田露伴の演説を聞いています。維新の志士吉田松陰の「幽室文稿」を熟読しました。処がマコレーの英国史を読んだころから、大望が変わりナポレオンも秀吉も豪くなくなりました。ワーズワース詩集を熟読。哲学とか、宗教とかを、ひねくつていると自然と文芸に縁がついてくるもので、我知らずいつの間にか書いてみるようになり、やがて身を助ける芸となりパンを得る唯一の手段となりました。多方面にわたる深い読書力が「明治の文豪」と呼ばれる作品の要因なのかもしれません。

木村一郎さんのお宅に伺い、家族・祖先のことを聞くと、祖先の方が独歩と非常に深い関係があったのではないかと興味を持ち、木村さんはいろいろな調査を行っています。祖先の木村茂さんは、独歩から鶴谷学館で教えてもらったことがあるそうです。